

地域おこし協力隊OG 中西美由紀さん (写真左から2人目)

“つながり”をキーワードに、 これからも地域と共に

(取材・文/地域おこし協力隊 家入明日美)

任期は、2019年8月～2022年7月。協力隊メンバー内では、頼れる姐さんの存在。仕事のことからプライベートのことまで親身になって相談に乗ってくれる姿は、そのまま移住者や空き家等の相談者からの信頼感につながっているように思えます。私生活では地域活動へも積極的に参加。刈払機で草を刈るのが楽しいとか。カエル好きなお茶目な一面も。



みなみあその
くらしものがたり
(Instagram)



左/「みなみあそでつながろう」をテーマに企画した、第0回みなみあそ軽トラ市。空き家・移住相談会も同時開催。新鮮な野菜やおいしい食べ物などを通して、村の魅力に触れていただく機会となりました。今後も、現役協力隊主動で継続予定。

中・右/「南阿蘇村みんなのための空き家活用セミナー～次世代に住まいをつなぐために～」。所有者からの相談を受けるなかで見えてきたのは、「家族が大切にしてきた家や土地を、自分の代で手放してしまうのは忍びない…」という葛藤。手放さずに活用する考え方について、村内の築140年の実家を民泊「お宿でん吉」に改修している原田吉雄さんを講師に迎えて学びました。参加者からは「売却、賃貸以外の活用方法として全然考えたことがなかった」「村外にいる子ども達からも使わないと言われている家。こんな使い方もあるんですね」と感動の声が寄せられました。

夢見るように思い描いていた“いつか”の風景。中西美由紀さんにとってのそれは、「山が連なり、田んぼが広がる景色の中にいる自分」でした。仕事や農業ボランティアとして関わるなかで、「ここ(南阿蘇村)やな～って思った」と笑う中西さん。特に田んぼに裸足で入って草取りをしたことが、「土地に受け入れてもらえたように感じたのかもしれない」と振り返ります。そうして少しずつ膨らませた、南阿蘇村やそこで暮らす人々への思い。ちょうど子育てが終わるタイミングで移住を決意したそうです。

ところが、家探しは難航。「移住したくても住む場所がない」という課題は、当時も今も変わらないようです。そんなときに出会ったのが、当時移住定住促進プロジェクト担当だった地域おこし協力隊員。中西さんもまた

同じ舞台で動き始めることとなりました。

移住当初の目的は農業に携わること。けれど移住者目線と地域目線の双方から、空き家や移住の課題に携わったことで、「それだけじゃない」方向へと意識が向かっていきます。3年の任期を経て、中西さんが口にするのは「つながり」という言葉です。

「つながることで、違う世界を見られることもある。その感覚を知ってもらえれば、次の一步を踏み出しやすいのかも」。家族だけでなく、近隣住民、移住者、土地などとのつながり。それらを大切に育てていくことで、「出口はきっとある」。真剣に関わってきたからこそ、難しさもやりがいも喜びも、すべてが中西さんの身となっています。今後も空き家や移住希望者のサポートに関わっていけるよう準備中とのこと。



左/「農作業がとにかく楽しい」。農作業の手伝いなどを通して、一次生産者の皆さんと交流しています。中/地域の皆さんと一緒に、村の特産品を目指して栽培中のルバーブ。右/協力隊退任の日、吉良村長より感謝状をいただきました。